

重おもでい足を引きずつて、少し小高こだかい松林まつばやしのところへ来たたら、すうつと体が軽くなつたつうだな。

すると、こんな声が聞こえたど。

「私は、なかつつあま稲荷いなりだ。ここに祀まつつて四月十七日を縁日えんにちにするように。」

小川某なにがしという人が振り返ると、うしろに侍わかしゆうすがたの若衆姿わかしゆうすがたの小男が立っていただど。

小川某なにがしは、夢から覚めたように、吾われに帰ると、腰がぬけたかと思うほどたまげて、ころびまろびつ帰つてきたそうだ。

口も利きけないほど顔色がなかつたつうが、水を一口飲んで気を落おちつかせ、たつた今の不思議な出来事を家の中でしゃべつたど。

家の者たちも、

「信じられない薄気味悪うすきみわるそうな話では、あつけんじよも、昔から靈験れいげんあらたかななかつつあま稲荷いなりのことだから、そうしたこともあり得ることだんべ。」